

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 42 回

定期演奏会

平成 13 年 4 月 3 日 (火) 午後 7:00 開演

カザルスホール



プログラム

第一部

指揮：山本雅三

- 交響曲第40番 ト短調 K 550 第一楽章
(Symphonie 40 g-moll 1. Molto Allegro) W. A. モーツァルト
(山本雅三 編曲)
- 舞踏への勧誘 (Aufforderung zum Tanz) C. M. ウェーバー
(F. ジュネット 編曲)
- マンダリン・オーケストラのための アル・テ・コ組曲 青島広志
(Suite Arts de'cos for Mandolin Orchestra)
- I ラグ・タイム (Rag-time)
- II ジャバ (Java)
- III フォックス・トロット (Fox-trot)

第二部

指揮：石黒不二夫

- 民謡調間奏曲 平山 英三郎
- 茜 (あかね) (Ruddy Sun) 武井 守成
- 雅楽 五常楽 急 (Goshoraku-Kyu) G. コメツリ

第三部

指揮：石黒不二夫

- 秋の夕べ 幻想曲 (Tramonto d'Autunno Fantasia) G. マネンテ
夕べ (Tramonto)
- アヴェマリア (Ave Maria)
- 麦打ち場での踊り (Ballo sull'Aia)
- 望まれし日 奇想曲 (Giorno Desiato Capriccio) G. プランツォーリ



曲 目 解 説



第一 部

交響曲第40番 ト短調 K. 550 第一楽章 モルトアレグロ

W.A. モーツァルト
山本 雅三 編曲

冒頭のメロディーは「愛は永遠に」または「哀しみのシンフォニー」の名前でポピュラーとなっていますので、数多いモーツァルト(1756年～1791年)の交響曲中でももっともおなじみの曲かと思えます。モーツァルトは第39・40・41の最後の3大交響曲を1788年の6月から8月の間に一気に書き上げたと言われています。しかも生活が困窮のなかで、演奏されるかはっきりとした見込みもなく、古典派交響曲の円熟の極致といえる3曲をひと夏で完成させたことは、まさしく天才の神業として驚嘆に値します。明るく気高い39番、雄大で荘厳な41番「ジュピター」に対して、40番は“ほほえみの背後にはいつも涙があった”といわれるモーツァルトの内心がうかがえるような、運命的な悲哀感に満ちています。この第1楽章は序奏が廃され、あの印象的な第1主題が直に登場し、ト短調の憂いを秘めた情感の世界に聴衆を引き込んでいきます。第2主題は第1とは対照的に穏やかな流れを持ちますが、どちらも短2度下降の動きから形成されています。展開部では第1主題の対位法的展開が行われます。(山本)

舞踏への勧誘

C.M. ウェーバー
F. ジュネット 編曲

ドイツのロマン派の先駆者ウェーバー(1786年～1826年)が1819年に愛する妻カロリーネの為に作曲したピアノ曲が原曲です。そのうち、1843年にパリのオペラ座でウェーバーの歌劇「魔弾の射手」が上演された際、指揮者を務めていたベルリオーズが当時の流行で劇中にバレエ場面を加える事が必要になり編曲し、管弦楽曲としても有名になりました。曲はまず穏やかな序奏に始まります。この序奏にはウェーバー自身による標題的な説明があります。舞踏会で一人の紳士が若い婦人にダンスのパートナーを申し込みます。ご婦人は遠慮がちに断りますが、紳士が重ねて熱心に誘うと、ご婦人も結局同意し、二人の静かな会話が交わされます。次第にうちとけて二人はダンスの中へ入っていきます。主要部分は華やかな舞踏会の場面が小ワルツの連続で、次の時代のウィンナ・ワルツのような形式で、生き生きと描かれます。ワルツがきっぱりと終わった後、始めと同じように紳士と淑女の挨拶を表現した短い後奏で曲は締め括られます。演奏技巧の効果、標題音楽的な性格、舞曲のリズムの芸術的な扱いにロマン派の先駆的な特徴がよく現れています。(山本)

マンドリン・オーケストラのための アール・デコ組曲

青島 広志

作曲家青島広志は1955年東京に生まれ、東京芸術大学大学院作曲科を主席で終了。芸大在学中から作曲・演奏・執筆などの分野で活躍し、ピアニストとして小沢征爾ほか内外の著名な音楽家と共演し、特に声楽の伴奏者として功績は高く評価されています。NHKテレビ「ゆかいなコンサート」のレギュラーを8年間、ラジオ日本「クラシック・コンサート」のレギュラーをやはり8年間務めております。現在、東京芸術大学・都留文科大学・東京芸術高校講師、作曲家協議会・日本現代音楽家協会会員、東京室内歌劇場運営委員を務めています。

この曲は新潟ドルチェ・マンドリン・アンサンブルからの新作依頼により作曲したもので、1994年9月3日に初演され、その後、現代ギター社刊の「現代邦人マンドリン・オーケストラ・ライブラリー③」として出版されました。そこに記載されている作曲者の序言と曲目解説を以下にご紹介いたします。

(山本)

以前どこかの大学のマンドリン・クラブの演奏を聞いたとき、そのトレモロ奏法があまりに扇情的なものと、そのために細かいリズムが失われてしまうことに驚き、そして少し困りました。その後、母校のソルフェージュ科講師を勤めるようになったことも手伝って、特にリズムの問題に関しては正確を期したいと思うようになりました。

'90年代に入って、私の創作活動がそれまでの声楽・舞台用作品から拡がって、撥弦楽器(ハープ、ギター、箏、三絃)のための曲にまで達しました。その頃、前作にあたるギター曲の委嘱者である田辺伸

五郎さんの友人で、新潟市にお住まいの飯島正巳さんと知り合い、彼が指揮をする新潟ドルチェ・マンドリン・アンサンブル（代表：滝沢 諒）のために、マンドリン・オーケストラの新作を頼まれたのでした。飯島さんも、私と同じくトレモロ奏法に対する疑問をお持ちだったために、この作品はスタッカート（ピチカート）奏法を念頭に置いて構想されています。しかし、やはり最大の特徴である叙情的なトレモロ奏法を捨て去ることはできず、第2楽章はそれを多用することになりました。とはいえ、指定された箇所以外にトレモロを用いてはいけなく、というわけではなく、テンポ設定、奏者の人数、演奏会場の広さと響きによって、指揮者に選択をお願いしたく存じます。なお、ギターとコントラバスのパートは任意で、奏者がいなければ省略することも可能ですし、マンドリンの各パートも、どうしても複数の奏者が必要というわけではなく、四重奏も可能ですが、もちろん全パート揃っての演奏が基本です。多くの機会を取り上げていただければ作曲者にとってこれほど嬉しいことはありません。

この曲は1920年代のヨーロッパ、特にベルリンとパリで流行した音楽スタイルによる3曲からなる組曲で、各楽章は独立して演奏することができます。この時代の美術、工芸はアール・デコ様式と呼ばれ、一時代前のアール・ヌーボーが曲線を多用したふくよかな形態を重んじたのに対し、直線的で、潔い機能美を追求したデザインが中心でした。音楽でも、クルト・ワイル、ヒンデミット、クシェネクなどの表現主義がほぼ同じ傾向を示しています。また、異国趣味も相変わらず盛んで、特に新大陸から入ってきたジャズや、東南アジアの民族音楽、それにハバネラが逆輸入されたタンゴなどが多くのファンを掴みました。

第1楽章〈ラグ・タイム〉は、19世紀末にアメリカで流行したジャズの前身で、故意に正規の拍とずらしたメロディーを持ちます。ここでは、息の長いやや異国的なメロディーと、正確な拍の刻みが同時に現われます。前者がトレモロ奏法、後者がスタッカート奏法です。

第2楽章〈ジャバ〉は、20世紀初頭、第1次大戦前にパリで流行した3拍子のゆっくりしたワルツです。ジャン・コクトーの戯曲「女中のアンナ」にも台詞として出てきます。もの憂く、途切れ途切れなメロディーがそれぞれのパートに移っていきます。

第3楽章〈フォックス・トロット〉もラグ・タイムと同じくアメリカの音楽で、行進曲のような刻みを持つ舞曲です。ここでは、後半に突然複合拍子の変奏が現われるという、ブロードウェイ・ミュージカルの大団円（フィナーレ）の手法を取り入れました。

第二部

民謡調間奏曲

平山 英三郎

作曲者は1991年（明治44年）青森県五所川原市に生まれ、早稲田大学政経学部に進学し同大学のマンドリン楽部で中心的に活躍し、卒業後今日に至るまでマンドリン界の指導者として活躍しています。在京マンドリニストの懇談会「マンドリンの群れ」をつくり、紀元2600年合同演奏会の開催に尽力し、実現させ、現在の日本マンドリン連盟結成へとつなげました。砧会を主宰、1950年（昭和25年）に第1回演奏会を開催し、今年6月に第98回の定期演奏会を予定しています。OSTの特別会員として演奏会に参加されたこともあり、現在顧問をお願いしています。1981年日本マンドリン連盟から特別表彰を受賞、1995年には五所川原市から文化褒章を受賞。作曲は50数曲におよび、曲集、教則本など多数出版しております。

この曲は1921年（昭和10年）の作。日本の民謡を基調とした情感あふれるメロディーで構成されています。マンドリンアンサンブルの味わいが非常によく感ぜられます。（石黒）

あかね
茜

武井 守成

作曲者（1890年-1949年）は当楽団の前身であるオーケストラ・シンフォニカ・タケイ（OST）の創設者で、宮内省の要職に就くかわら、楽団の育成・指揮と作曲に傾注され、日本のマンドリン音楽の発展に大きな貢献をされました。

この曲は作品 No63（作曲数116）で、1942年（昭和17年）の作。同年5月のOST定期演奏会で作曲者自身の指揮により初演されました。4/4拍子で始まる導入部6小節のあと2/4拍子のハバネラ風のメロディーが展開され、中間にタンゴ風の変化が挿入されておりますが、楽譜の冒頭に作曲者の言葉で「タンゴでもハバネラでもない。赤い淡日さすころの感情を音にうつしたまで」と記されております。

（石黒）

ごじょうらく きゅう

雅楽 五常楽 急

G. コメリ

作曲家（1894年-1977年）はイタリア・ミラノのヴェルディ音楽院卒業。昭和のはじめにイタリアのカービ・オペラ団の副指揮者として来日したコメリ氏をOSTの創始者で宮内省楽部（雅楽と洋楽）長であった武井守成氏が宮内省楽部洋楽の指揮者に迎えました。第二次大戦後、職を解かれてから藤原歌劇団でオペラの指揮者を務め、NHK交響楽団の指揮もしております。この間OSTの指揮もされておりました。日本を愛し日本人の妻を娶り長寿を全うし日本の地に永眠しました。

五常楽は舜の虞昭楽の遺声ともいわれ、また唐の太宗の作とも伝えられる平調の曲で「序」、「破」、「急」の3楽章からなります。その第3楽章の「急」の主旋律と華麗な笙の和声・和楽器の管弦楽的效果を基礎として作られております。東洋風の香り高い幽玄静寂の気品に溢れるスケールの大きい雅楽として表現されています。原曲は管弦楽で作られましたが、マンドリン・オーケストラのために作者自身が書き直しOSTで何回か指揮をされました。（石黒）

第三部

秋の夕べ 幻想曲

G. マネンテ

作曲家（1868年-1941年）はイタリア・ナポリの北東モルコーネに生まれ、ローマで亡くなりました。マジュリアの聖ピエロ王立音楽学校でトランペット、和声楽、作曲法を学び、マドリッド音楽学校に進み、さらにローマの聖チュチリア高等音楽学校を卒業しました。歩兵連隊の軍楽隊長となつてから吹奏楽の著名な作品を相次いで発表しコンクールで入賞もしております。マンドリンにも関心を持ち「マンドリン芸術」「古典的形式による交響楽」をはじめ多数の名作を残しています。

この曲は1908年II Pietto誌主催の作曲コンクールで入賞しました。3楽章からなる幻想曲で平和なイタリアの農村の夕方の情景を描いた作品です。第1楽章は農民が仕事を終え羊の群れをゆっくり追いながら帰ってくる田園風景を表現しております。羊の群れの鈴の音が遠くから近づいて農夫の歌声が聞こえ通り過ぎて、次第に遠ざかっていきます。間をおかず、つづいて演奏される第2楽章は農民が教会で夕べの敬虔なお祈りをして一日の無事を感謝し明日の幸せを願っております。教会の鐘が鳴り、オルガンの音につづき祈りに入り、ふたたびオルガンが静かに鳴り終わります。第3楽章はお祈りを終えた農民と家族たちが麦打ち場に集まって、皆で楽しく踊りをおどっている情景です。タランテラの早いテンポで楽器を鳴らし、手を叩き、唄をうたっているうちにようやく日が沈み、イタリアの秋の長い夕べが終わっていきます。

曲名は「秋の夕暮れ」「晩秋」などと邦訳されていますが、イタリアの秋の日の長い夕方の情景を表現している曲想から「秋の夕べ」とするのが適訳と思います。（石黒）

望まれし日 奇想曲

G. ブランツォーリ

作曲家（1845年-1909年）はイタリア・ボローニャに近いCentoで生まれ、ローマで没しています。作曲家であるとともにヴァイオリニスト・マンドリニスト・ギタリストでもあり、イタリアの音楽学校でバイオリンや和声楽の教授をつとめたり、劇場オーケストラの指揮者としても活躍しておりました。ムニエル、ベレンギ、ブラッコ、クリストファロ等とともにマンドリン音楽を隆盛に導いた貢献者と云われております。マンドリンのために作った曲は多数あり、いずれも特徴ある作品です。

この曲は1920年（大正9年）11月に、オーケストラ・シンフォニカ・タケイの前身のシンフォニア・マンドリーニ・オーケストラの第10回定期演奏会で本邦初演されております。ハープ（またはピアノ）が入りますので、あまり演奏される機会がありません。「望まれし日」という曲名は何を意味しているか、解説がなく判りませんが、曲想から推定するところでは、難しい環境のなかで愛し合った二人がようやく結ばれる日がやってきて、周囲から祝福を受けて日が昇るような人生のスタートをする、その長い間望んでいた日のことを意味しているものと解されます。

曲はアンダンテ・モッソの序奏のあとレントに続くアダージョに移り、女性の心の揺れ動く様が、つづいて男性の心強いしかしロマンチックな心情が巧に表現されております。そして二人の心の通じ合いと、周囲からの理解と援助を得て、華やかな祝福の舞踏会が催され、二人の愛の二重奏が奏でられ、ゆったりと平和な静寂裡に曲は終わります。（石黒）

指揮者：*石黒不二夫 *山本雅三

コンサートマスター：*本間輝樹 嶋直樹

第一マンドリン：*本間輝樹 田島明子 諸井美津江 宮崎敏行
嶋直樹 新居裕久 城戸かほる 前田啓子

第二マンドリン：*後藤俊明 坂井美佐子 平賀理英子 富田容子
*藤田正美 山崎悦子 高梨一弘 中村順子
*岡田茂

マンドラ コントラルト：*岩片順子 滝田ふさ子

マンドラ テノール：*岩片順子 田中倭文子 滝田ふさ子
渡辺清 玉木理恵子 佐々木興治 深野靖夫

ギター：宮本紀子 平田陽一 *山本雅三 戸次脩二
高橋貴久子 城所俊雄 高橋悠介 門田雄二
沢田行雄

リュート モデルノ：*宮本皓永

マンドチェロ：宮崎泰行 田村美恵子

マンドローネ：*家城孝治 宮沢栄作

コントラバス：佐藤正 ・濱田眞以子

フルート：・比護いづみ

クラリネット：・有馬理恵

ピアノ：・浦島晶子

打楽器：・秋葉久美子 ・富田篤

{ * ————— 幹事 }
{ ・ ————— 賛助出演 }

当OSTで長い間メンバーとしてマンドローネを弾いておられました 高田三九三氏が享年94才で昨年12月26日にご逝去されました。永年のOSTへの貢献に深く感謝いたしますとともに衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

オーケストラ シンフォニカ 東京 (OST)

連絡先：〒239-0844 横須賀市岩戸4-14-16 石黒不二夫

TEL 0468-49-0848